



今年46歳になる愛娘の麻紀さんと一枚



ブロップ・ステーションのスタッフたちと。ブロップ・ステーションで学んだ多くのチャレンジドたちが在宅で生き生きと働いている

れば仕事ができる」と答えたので、翌年に就労を目的にしたパソコンのセミナーを開催したんですね。そのセミナーで技術を習ったチャレンジドに、ブロップ・ステーションが企業から請け負った仕事を割り振っていく。そうしたビジネスモデルをつくっていきました。ただ、当時はパソコンの値段が非常に高く、コンピュータで仕事をすると言いながら、団体では一台も持っていなかったんです。高橋 高価で購入できなかった。竹中 だから私は、ないものはSOSを出して、助けてくれる人の協力で揃えようと、支援者のネット

ワークづくりに取り組んでいきました。幸い、私は周りから「鉄の心臓に苔が五重に生えている」と言われるほど、どんな人の前にも出て怖くなかったもので、びびらずに経営者の方々に会いに行つて、社会貢献などの面から仕事を発注する効果を訴え、「先行投資してください！」と、寄付を募っていったんですね。高橋 ああ、先行投資だと。竹中 そうした取り組みを続けていくことで、アップル社からパソコンを寄付してもらうなど、だんだんと活動の基盤ができていきました。それから、新聞にプロ

ブ・ステーションの活動が紹介されたのを見てくださったマイクロソフト元社長の成毛眞さんにも、「Windows95」を何セットも贈っていただきました。成毛さんには、その後もご自身の勉強会や、創業者のビル・ゲイツ会長にも紹介していただくなど交流が続き、後にブロップ・ステーションが社会福祉法人化する際にも一億円の基金のご支援をいただきました。

ようやく時代が追いついた

竹中 ただ、やっぱり私たちの草の根の活動では限界があつて、障がい者雇用の法律など、国の方針が変わらないとだめだと段々気づき始めたんです。例えば、企業や官庁に一定割合の雇用を義務づける法定雇用率がありますが、それでは自宅での介護が日常的に必要で、通勤できないチャレンジドは支援を受けられません。高橋 国を変えないといけない。竹中 それで当時は、自分たちの主張を通すために、団体交渉のよきな形で力づくで国の分厚い扉を叩き割るみたいな運動、方法が盛

んだっただけですけど、私はそれより、扉を叩いたら向こうからこっそり鍵を開けてくれる協力者を国に一人、二人つくるほうが早いんじゃないかなって思つたんです。そして、実際に周囲の人にいるの相談して、当時、労働省（現・厚生労働省）の障がい者雇用対策課長だった女性の方に、「あなたも男社会で頑張っているかと思ひます。私もこういう団体をつくつて、チャレンジドの人たちとこんなことに取り組んでいます。一度会っていただけませんか」という熱い手紙を書きました。高橋 それはまたすごい。竹中 その女性課長は、障がい者雇用に関する政策をどんどん進めていて、世間でも有名な方でしたから、会うのは無理やと思つていました。ところが、しばらくして「お会いします」と返事が届いて、東京の霞が関まで会いに行つたら、「できる範囲で応援するわ」って言うてくださったんです。高橋 ナミねえの熱い思いが伝わったんですね。竹中 それから、霞が関で勉強会をしてくれたり、いろいろと陰ながら支えてくださっていたんです